



〈雑録〉印度ニ於ケル自治運動ノ發達(3)

海老原, 竹之助

(Citation)

經濟學商業學國民經濟雜誌, 26(5):819-823

(Issue Date)

1919-05

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00053042>



印度ニ於ケル自治運動

ノ發達 (其三)

商學士 海老原竹之助

七

話ハ再ビチラク氏ノ自治協會ニ戻ル、風ノ野ニ引ク落葉ヲ吹捲ク勢ヲ以テ全印度ヲ風靡シタ自治協會ハ已ニ多數ノ會員ト多額ノ資金トヲ蒐集シテ印度ニ於ケル陣容ハ已ニ成ツタ、殘ル所ハ英本國ニ代議員ヲ送りテ其輿論ト議會トヲ動かスニ在ルノミ、乃チ先ヅ本年三月十八日ホウゼモン、グルツノ兩氏ヲ送り、次デ同月末ニハチラク氏ヲ筆頭トシバル、カバルデ、カラランダカー、ケルカーノ四氏ヲ加ヘタ一行ガ渡英スルコトトナリ、廿七日、孟買市ニ於テハ熱狂シタル市民ノ Unparalleled great send off ガ一行ノ

爲メニ行ハレタノデアル。

然ルニ意氣揚々トシテ鐵路孟買ヲ發シ、四月二日コロンボニ到着シタル一行ハ四日ニ至リ突然英國政府ヨリ渡英禁止ノ命ニ接シタ、一行ノ驚愕ハ去ル事ナガラ彼等ヲ支持スル自治黨員ノ憤慨ハ一方ナラズ各地ニ市民大會ヲ開イテ抗議スルアリ、一旦印度政府ノ與ヘタル「バスボート」ヲ本國政府ヨリ取消サル、ガ如キハ印度政府ノ威信ニ關スル重大問題ナリト叫ブアリ、一行モ亦直チニ總督ニ打電シテ調停ヲ乞フナド百方奔走ノ結果、兎ニ角、總督ノ取計ヒニヨリ、(一)一行ハケーブタウンマデ行クコト(二)其間ニ本國政府ガ許可スレバヨシ(三)然ラザレバ一行ハ同地ヨリ引返スコトノ條件ニヨリテ出發シ得ルニ至ツタ、從來兎角、餘リニ評判ノ良クナイ總督チユルムスフオード卿モ之レニヨリテ多少人氣ヲ博シ少シク男ヲ上ゲタ觀ガアツタ。思フニ西部ノ戰況益々面白カラズ、加フルニ

當時、愛蘭士問題ハ再燃シテ本國ノ政界亦騷然タルノ時チラク氏渡英ノ飛報ハ確カニ本國政府ヲ驚カシタニ相違ナイ。而シテ所謂男ヲ上ゲタ總督ノ調停ナルモノモ型ニハメタ如クニ其効ナク十二日ニ至リテ戰時内閣ハ遂ニチラク氏一行ノ渡英ヲ許可セザルコトニ決議スト入電アリ、一行ハ其儘引返スノ止ムナキニ至ツタ、而シテ右禁止ノ理由トシテ四月十六日主府詩村ニ於テ發表セラレタル公報ハ左ノ如クデアツタ。

自治協會并ニ國民公會ノ派遣委員ニ對スル「パスポート」ノ問題ハ本日再び戰時内閣ノ問題トナレリ、而シテ吾内閣ハ現下ノ狀況ニ鑑ミテ自治運動委員ノ渡英ヲ許可セザルコトニ再決セリ、即チ政府ノ考フル所ニヨレバ此等委員ノ渡英ハ全ク不必要ニシテ其目的ニハ十分正當ナル理由アルヲ認メザレバナリ、過般印度省大臣ガ印度社會各團體ノ意見ヲ確ムル目的ヲ以テ渡印シタル際、此等ノ人々ヨリ直白シタル煽動者トシテ自國ノ自治制ニ對スル頑強ナル遊説ヲ試ミンガ爲メニ渡英シタキ旨ノ申出アリタリキ、斯クノ如キハ如何ナル時ニ於テモ適當ナル方法ト見ル能ハザル所ナレドモ殊ニ今日、國チ學ケテ大戰ニ參シ、且ツ國家存立ノ危機ヲ目前ニ控ヒ、國家努力

ノ集注ヲ必要トシ、出來得ル限り政治的動搖乃至主義政綱等

ニ關スル論爭ヲ停止スルヲ要スルノ時、斯クノ如キハ政府ノ到底認容シ能ハザル所ナリ、更ニ又、政府ハ已ニ印度省大臣ノ議會ニ於ケル宣言及同大臣ノ渡印等ニヨリテ英國政府ガ寬大ナル意見ナ有スルコトヲ證明シ居ルニ拘ラズ政府ガ其意見ヲ公表スル以前又ハ將ニ公表セント考ヘツ、アル失先ニ若シ或種ノ企畫ガ行ハレ且ツ尙早有害ナル遊説ニヨリテ其實行ヲ強フルガ如キコトアラバ英國政府ノ寬大ナル意見ハ爲メニ非常ニ損傷セラレ或ハ致命的破壊ヲ受ルキモ計ラレズ、サレバ政府ハ以上ノ決議ニ到達スルノ已ムナキヲ悲メドモ亦他ニ出ツベキ方法ナキヲ奈如セン。

斯クテチラク氏ノ一行ハコロンボヨリ、先キニ進ンダボーゼン氏ノ一行ハチブラタルヨリ引返スノ已ムナキニ至ツタノデアル。

八

露國ノ崩壞ニ次グ獨禍東漸ノ勢ハ段々ト印度ノ西北境ニ迫ツテ來タ、兵卒ノ不足ヲ感ジテ居ル英國ハ自然印度軍ヲ起シテ守備スルノ必要ニ迫マラレタ、爰ニ於テ本年六月十日孟買州ニ於

テハ(一)物資ノ供給(二)人力ノ供給ニ關スルコトヲ議スルガ爲メ知事ノ召集ニヨリテ *War Conference* ガ開カレタ、召集サレタ者ハ土人州ノ王様ヲ始メ政治ニ功勞アル者、社會各團體ノ代表者ハ勿論、チラク氏一派ノ自治黨員モ出席シタ然ルニ知事ウエリンドン卿ノ議長演說中、偶々自治黨員ノ行動ニ關シテ非難攻撃ノ矢ヲ放チタルガ爲メ茲ニ端ナクモ衝突ヲ起シ遂ニチラク氏ハ自治無クンバ自衛無シ (*Without Home Rule, Home Defence is impossible*) ノ一語ヲ殘シテ中途其席ヲ去ツタノデアル。

此事件ハ又タモ朝野ノ問題トナリ自治黨員ノ騷擾漸ク甚タシク從來割合ニ評判ノ良カツタウエリンドン卿モ一朝ニシテ惡魔ノ現化ノ如ク非難セラル、ニ至ツタ。

チラク氏揚言シテ曰ク、

英國政府ニシテ誠實ヲ以テ吾人ニ臨マバ吾ガマラタンノ一地方カラデモ立ロニ三千人位ノ義勇兵ハ予一個ノ手ニヨリ募集

シテ見セル、若シ三千人ニ不足シタル場合ハ不足分一人ニ對シテ予ハ百留ツ、支拂コトヲ辭サナイ、
此等ノ言ハ印度人ノ戰爭熱ヲ冷却シ、爲メニ政府ノ義勇兵募集ハ甚ダシキ成功ト見ルコトハ出來ナイ有様トナツタ。

カ、ルガ間ニ七月七日ニ至リテ印度内政改革案ハ印度省大臣モンテギユー氏及印度總督チエールムスフォード卿ノ名ニ依リテ發表セラレ印度ノ政論又モ騷然タルニ至ツタノデアル。

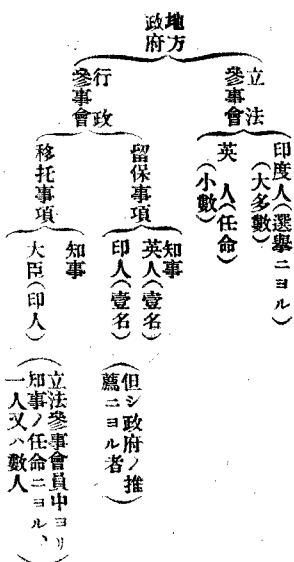
九

今其改革案ハ *Report on Indian Constitutional Reforms* ト題シ二百四十三頁ノ一冊子トナリテ著ハレタ、從ツテ茲ニ之レヲ詳論スルノ暇ハ無いガ其要領ヲ示セバ大體左ノ通りデアル。

中央政府

立法集會 {英人(三分ノ一)
(百名) 被選舉員(三分ノ二)}
帝國參事會 {英人(二十六名、何レモ任命ニヨル)
(五十名) 印度人(二十四名、選舉ニヨル)}

外ニ政治ニ功勞アル官吏、土人州ノ王様、帝國參事會員及高等法院ノ判事ヲ網羅スル樞密院ヲ設ケテ總督ノ諮問機關タラシムルコト。



而シテ中央政府ノ場合ニ於テハ總督ハ

一、何時ニテモ立法集會及帝國參事會ノ解散

ヲ命スルノ權能ヲ有シ

一、立法集會及帝國參事會ノ決議ハ法律トナ

ラズシテ常ニ一種ノ推薦タルニ止マリ

一、之レニ同意シ、之レヲ留保シ、又之レヲ

拒否スルノ權能ハ全ク總督及皇帝ニ屬シ、

且ツ

一、總督ハ訓令ヲ發シ法令ヲ布キ其他種々ノ

規則命令ヲ制定スルノ權能アリ

又地方政府ノ場合ニハ知事ハ

一、行政參事會ノ兩者ヲ同時ニハ別々ニ召

集スルノ權能アリ

一、立法集會ノ會長トシテ何時ニテモ之レヲ

解散スルノ權能アルノミナラズ

一、立法集會ノ決議ハ單ナル推薦ニ過ギズシ

テ

一、如何ナル種類ノ決議モ知事并ニ總督ノ同

意ヲ得ルニアラザレバ法律タラズ。

依是觀之、印度人ハ從來ノ專制政治(信夫氏

著「印度ノ現勢」九一頁以下參照)ニ比シテ大ニ

政治的活動ノ範圍ヲ大ナラシメタルガ如キモ政

治上ニ及ボス實際ノ効果カラ觀レバ實ハ何物ヲ

モ得テ居ナイノデアル、勿論之レニ依リテ政治

ニ參與スル印度人ノ數ハ増加スルコトトナツタ

之レガ實施ヲ見ルノ曉、政壇ニ立ツ印度人ノ數

ハ多クナリ、雄辯家ハ出デ、議論ハ百出シテ花ヲ咲カスデアラウ、然シ最後ノ決定權ガ彼等ノ掌中ニ無クシテソレガ果シテ何デアアル、總督、知事ノ一顰一笑ガ相變ラズ議會ニ於ケル大多數ノ印度人ノ正當ナル議論ヨリハ重キヲナシテ居ル以上「多數」ト云フ名ハ實際政治トハ沒交渉ト云ハネバナラヌ。

緩和派ノ人々ガ右ノ提案ヲ以テ自治ニ對スル第一歩トシテ姑ク容認シヤウトシテ居ルノ時、急進派ノ連中ガ國民公會ノ特別會議ヲ八月末孟買ニ開キ盛シニ反對ノ氣勢ヲ示シ、吾人ノ要求ハ未ダ一ツモ容レラレテ居ナイト息マイテ居ルノモ滿更理由ナイデモナイ。(完結)

附記 予ハ以上、印度ニ於ケル自治運動ノ近況ヲ歴史的ニ敘述シタ、而シテ印度現下ノ狀況ヲ批評シ自治運動ノ將來ニ及バントスル續論ハ「印度ノ現勢ト自治運動ノ將來」ナル題下ニ筆硯ヲ新タニシテ述ベテ見タイト思ツテ居ル。(大正七年十一月一日)